

健康・医療活動賞 候補者・受賞者／団体

健康・医療活動賞は卓越した健康・医療活動を行ってきた本会会員の所属する個人または団体を表彰するものであり、受賞者は総会において賞状、副賞が授与され、学術講演会で受賞講演を行います。

選考年度	候補者・受賞者／団体			活動名	講 評
令和2年度	受賞	団体	一般社団法人あんしん母と子の産婦人科連絡協議会 (代表：鮫島 浩二 先生)	生後0日虐待死を防止する産婦人科医療機関の連携 ～特別養子縁組も見据えた特定妊婦支援～	<ul style="list-style-type: none"> 日本では馴染みの薄い特別養子縁組という重要な制度の支援の持続的援助活動であり、母と子の福祉に大きく貢献していると考えられる。専門的立場から地道な努力を続けている点が評価できる。 単施設ではなく、全国の加盟施設が連携する協議会のため、養親制度の充実が期待できる。斡旋するだけでなく、養親の教育入院や退院後のフォロー体制もある点が評価できる。
	候補	団体	日本母体救命システム普及協議会 (代表：石渡 勇 先生)	母体救命のための研修システムの確立と普及活動	<ul style="list-style-type: none"> J-CIEMELSの設立により、あらゆる職種の母体救命法に対する意識が高まった。また、統一したプロトコルを提示したことこの意義は極めて大きいと考えられる。 母体救命のシミュレーション教育の普及に着実に取り組み、功績は大である。インパクトのある事業であり、これまでの受講者が15,000人を超えている点が評価される。
	候補	団体	NPO法人性暴力救援センター・大阪SACHICO (代表：加藤 治子 先生)	性暴力被害者への総合的・継続的支援をめざして ～セクシュアル リプロダクティブヘルス&ライツ(性と生殖に関する健康と権利)の回復のための産婦人科医療とは～	<ul style="list-style-type: none"> 性暴力被害者の救済を目指した地道な活動が評価できる。現状に即した取り組みであり、社会への貢献度が高い。 産婦人科の専門性を活かし、精神科医や他の医療スタッフも加えた体制により性暴力被害者への支援を包括的に行っている点が評価される。先導的な取り組みとして周囲への波及効果も大きい。 日本で最初に創設された本格的なワンストップセンターである点を評価する。24時間体制である点、精神科医師やカウンセラーの配置、カウンセリングの支援体制、各地での研修援助を行っており、先駆けとなっている。
令和3年度	受賞	団体	国立研究開発法人国立国際医療研究センター 国際医療協力局 (代表：藤田 則子 先生)	開発途上国における母子保健・産婦人科医療向上のための人材育成制度強化活動	<ul style="list-style-type: none"> 国際貢献という観点で長年にわたって継続的に活動している。世界レベルの重要な活動で成果が確実に出ている。国際貢献、獨創性、事業規模を高く評価した。
	候補	個人	佐藤 雄一 先生 (産科婦人科館出張佐藤病院 院長／高崎美スタイルマラソン実行委員会 代表)	産婦人科を中心とした行政・地域・多世代連携型・子宮頸がん予防啓発活動～子宮頸がん予防啓発「高崎美スタイルマラソン」～	<ul style="list-style-type: none"> 専門の不妊領域のみならず、健康増進のための活動を多方面で行っている。マラソンと検診をつなげる発想はユニークで、地域での官民の様々な組織との連携が高く評価される。
	候補	団体	避妊教育ネットワーク (代表：北村 邦夫 先生)	避妊教育ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> 避妊、性教育の普及など地道に継続的に活動している点が高く評価できる。
令和4年度	受賞	個人	佐藤 雄一 先生 (産科婦人科館出張佐藤病院 院長／高崎美スタイルマラソン実行委員会 代表)	産婦人科を中心とした行政・地域・多世代連携型・子宮頸がん予防啓発活動～子宮頸がん予防啓発「高崎美スタイルマラソン」～	<ul style="list-style-type: none"> 子宮頸がん予防啓発をテーマとして高崎美スタイルマラソンを開催している。子宮頸がんに関する正しい知識・検診の重要性等を楽しく学ぶことができるマラソンで、1,800人もが参加する一大イベントとなっている。毎年開催しており継続性もある。NHKなど多くのメディアでも取り上げられ、知識の広報にも有益である。 地道な取り組みで地域の貢献度が高い。HPVワクチンの接種数などの増加がみられるなど、成果も挙げている。 目的を持って継続しており、社会的インパクトがある。また個人でこのような活動を継続していることに評価できる。 獨創的で本賞のコンセプトにマッチしている。
	候補	団体	医療法人財団足立病院 社会福祉法人あだち福祉会 (代表：畑山 博 先生)	子育て支援を通じた街づくり	<ul style="list-style-type: none"> 子育て支援という大切な視点で地道な活動を継続している。少子化対策の面からも重要な活動であると評価する。 「もう一人産みたいと思える社会」の実現を目指し、地域限定ではあるが着実な成果をあげている。社会的な貢献は大きい。 17年間子育て支援に尽力され、生活困窮家庭にも行き届いた支援をしている。少子化対策に力を入れており、社会貢献度が高い。
	候補	団体	京都産婦人科救急診療研究会 (代表：森 泰輔 先生)	京都産婦人科救急診療研究会	<ul style="list-style-type: none"> 産科救急に特化したアルゴリズムを構築し、獨自性の高い産科急変対応プロトコルを確立した。その後の産科救急医療の向上に對しての貢献度は大きい。本邦のみならず海外においても教育活動を通じて周産期の安全に寄与している。 産婦人科医療において妊産婦死亡の削減は最大のテーマである。京都で頻発した事例の反省から、研修コースを作って活動を継続しており、その活動はJ-CIEMELSのベジックコースとして認定され全国に拡大し、京都プロトコルで研修した医師・助産師は17,000人に及ぶなど、そのインパクトは大きい。 12年間卓越した医療活動を行ってきており、実績が多く高く評価される。

健康・医療活動賞 候補者・受賞者／団体

健康・医療活動賞は卓越した健康・医療活動を行ってきた本会会員の所属する個人または団体を表彰するものであり、受賞者は総会において賞状、副賞が授与され、学術講演会で受賞講演を行います。

選考年度	候補者・受賞者／団体		活動名	講評
令和5年度	受賞	個人 上田 豊 先生 (大阪大学大学院医学系研究科産科学婦人科学・講師)	HPVワクチンに関する学術的エビデンスの創出と自治体の子宮頸がん対策および母子保健事業に対する学術的支援	<ul style="list-style-type: none"> ・ 頸癌の健診及びワクチン接種について腰を据えた取り組みを行っている。 ・ 独創的で継続性がある。 ・ HPVに関する学術的エビデンスの創出と自治体に対する学術的支援は卓越している。 ・ 子宮頸癌検診およびHPVワクチンの重要性をデータで示し、これらの推奨のために自治体と共同で行っていることが評価できる。 ・ 数あるHPVワクチン接種率向上の取り組みの中でも、学術的な質・量ともに素晴らしい活動である。ワクチンの有効性や非接種者のリスクの検討のみならず、自治体との啓発運動の有効性も検討している点が秀逸である。 ・ 複数の学術的エビデンスを創出しており評価に値する。学術的な視点に基づいた活動を行っており評価に値する。 ・ HPVワクチン普及に関して学術的エビデンスを継続的に発信されてこられた。本賞の理念でもある積極的ワクチン接種勧奨の社会実装の視点からも健康・医療活動の貢献性が最もであると評価される。 ・ 学術的支援という新たな視点による健康・医療活動賞応募といえる。自治体との関係を構築するまでには大変な苦労があったと思われる。
	候補	団体 サンライズジャパンホスピタル産婦人科 (代表：杉山 彩子先生)	カンボジアにおける初の日本式産婦人科立ち上げの挑戦	<ul style="list-style-type: none"> ・ カンボジアにおける産婦人科診療の普及に取り組んでいる。 ・ 独創的である。 ・ カンボジアにおける初の日本式産婦人科を開設したことは国際貢献の点からも高く評価される ・ 産婦人科における国際協力として評価に値する。継続的に学会報告している点は評価に値する。 ・ いわゆる医療発展途上国における先進的な取り組みであり、カンボジアの女性医療の質向上に大きな貢献をされている。日本式の押し付けではなく、現地に受け入れられようとする努力も大変すばらしい。 ・ 産婦人科のなかったカンボジアで新たに開設した国際貢献に対する努力とその功績が評価できる。 ・ カンボジアにおける日本式産婦人科医療の導入に関して大きな国際貢献をされており、評価に値する。
令和6年度	受賞	個人 安部 宏 先生(南相馬市立総合病院)	東日本大震災からの復興	<ul style="list-style-type: none"> ・ 東日本大震災からの復興という意味で象徴的かつ重要な活動である。 ・ 大震災後の復興に長年にわたり取り組んでいる。 ・ 震災復興に際して地道かつ継続的に取り組んできた活動は、評価に値する。 ・ 東日本大震災からの復興を地域に根ざして長期にわたり取り組んでおり、その功績は賞賛に値する。 ・ 東日本大震災後、原発の影響も考えられる中で、家族と共に周産期医療を継続されたことに敬意を表し、地域医療に多大な貢献をしたと考える。 ・ 継続した取り組みが行政をも動かしたと考える。震災後の福島県の状況を鑑みると、分娩数の増加は受賞者および関係者の功績が大きい。
	候補	団体 避妊教育ネットワーク (代表：北村 邦夫 先生)	避妊教育ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長年にわたり、OC・LEPの適正使用とその普及に努めてきたことは大いに評価できる。 ・ メンバーの先生方それぞれが重要な活動を行っており、ネットワークが学びや繋がり場となっている点が素晴らしい。 ・ 長期間にわたり継続的に活動しており、その活動内容も社会的に重要である。活動の幅を着実に広げている点も評価に値する。 ・ 草の根的な運動から始まり、会員が増加してきたことは事業の発展を示している。
	候補	団体 特定非営利活動法人 母と子の医療を世界に届ける会 (代表：平川 英司 先生)	シエラレオネにおける持続可能な母子保健支援プロジェクト	<ul style="list-style-type: none"> ・ 途上国での活動を企業への医療提供や医療機器の開発と結び付けた点が興味深い。 ・ 日本の高いレベルの周産期医療を西アフリカのシエラレオネに展開し、その地域特性に合わせた医療提供を図るプロジェクトであり、世界的な母子保健医療の向上への端緒となる素晴らしい医療活動である。 ・ 発展途上国における母子保健の普及活動は非常に重要であり、周産期医療の向上に貢献している。